

Sera,Sera”なんです。ある意味、前作に入っていた“End Roll”のパート2みたいなイメージで書いてみたのがこれですね。

——ふたたび映画に喩えるならば、“Perfect Strangers”の時点ですでに物語は終わっていて、“Que Sera,Sera”のところからまさしくエンドロールが始まっているわけですね？

高野：そういうことです。物語のオチはあくまで“Perfect Stranger”にあって。そこでの主人公はジョン・ドウのほうですね。だから最後は男目線の感じで歌いあげて終わるのが今回はいいかな、と思ったし。

——曲がちょっと見えてきたらすぐに歌詞を、という作り方になってきたことについては何か理由というか切っ掛けがあったんですか？

高野：なんか最近、自分のなかで曲と同時に映像とかが浮かぶような感じが強くなってきてるんですよ。だからそのイメージを言葉にしていく、というか。このメロディとこのコード進行が最高だぜ、というのはもちろん今まで通りあるんですけど、そこに加えて、この曲ならムードとしてこういう絵だよな、みたいなのを浮かべながら曲を書くようになっていて。で、そのムードとか映像を言葉にしておくのが先決だろう、と思うわけです。忘れないうちにね。忘れちゃうんで、お酒呑むと（笑）。あとはやっぱ、ひとりでステージに立つ機会も多いんで、いつでも演奏できるようにしておきたいというのもある。メンバーと一緒にやる形だけじゃなくて、ひとりでやる段階でもそれがちゃんと完成してる状態というのを求めたいというか。

——確か以前、身近なところにいる方に〈ひとりでできることの割合を高めておくべきだ〉といわれたことがとても大きかった、という話をしていましたよね？

高野：うん。ひとりでやれる人なんだから、ってね。バンドが好きなのはわかるけど、ホントはひとりでやれるんだよって指摘されて、大事なところに気付かされたというか。なんで俺、歌とギターの両方をやってるかという、俺、ギターは下手くそだけど、俺みたいに弾いてくれる人が他にいないからなんですよ。じゃあ俺が弾きゃいいやっていう。でも言っちゃえば、俺みたいなドラム叩けるやつがないから俺はドラム・ヴォーカルでやる、みたいなことになってた可能性だっただけであつたわけですよ。なんか、心のどこかにはソロでやる気持ちというのが多分あるんです。だけど半面、ひとりでやってもつまらないから、やっぱみんなと、というのがある。

——寂しがりやじゃないですか、やっぱ！

高野：いや、それとは違うと思うんだけどね。ひとりで家でちびちび呑んでんの、大好きだし（笑）。ひとりの時間も大好きだけど、そうじゃない楽しみも知ってる、というか。やっぱもう、メンバーたちとの付き合いも長くなってきて、一緒にやり始めた頃に〈あ、そこは俺だったらこうやるのに〉みたいなのは、もはやないんですよ。みんなから聴こえてくるものすべてに対して〈そうそうそう、それぞれそれ！〉というのがある。だからアレンジとかもすごく早いし。もちろん、ときには意外性に驚かされることもあるけど。バンドを長く続けてるとやっぱ、こうなってくるのかなと思う。俺がそう感じてるように、メンバーも思ってくれてると嬉しいんですけどね。

〈会話はまだまだ続く。この話の続きは7月11日発売の『MASSIVE Vol.31』誌上にて〉